

## VI 特別寄稿

### 日本で英語を教えるノン・ネイティブ教師であること

寺 秀幸

『吾輩は猫である』の一節に、「番茶は英語で何と云いますか」と生徒に訊かれた苦沙彌（くしゃみ）先生が、「サヴェジ、チー（savage tea）だ」と答えたとある。苦し紛れに、頭に浮かんだ「蛮茶」という文字を直訳したと思われるが、同業者としてこの失態は笑えない。

職業柄、学生から様々な質問を受けるが、身も細る思いをするのがこの「〇〇は英語で何というんですか」である。学生にしてみれば至極当然の質問であり、また、仮にも英語教師であるなら受けて当然の質問である。

しかし、このような質問に答えることは容易ではない。なぜなら、往々にして教師は答えを知らないからである。もちろん、時には「番茶」のように相当する表現が英語にないこともあるが、たいていの場合は、不勉強のため答えられないのである。

だが、運悪くこのような質問に遭遇しても知らないと言えない。師の知識を信じて疑わない学習者の期待を裏切ることはいかからず。信用を失った教師の授業に誰が傾聴するであろう。これは教育の成否にかかわる大問題なのである。「先生、針のむしろって英語で何というんですか、先生、育毛剤って英語でどういうんですか……」遠慮のない質問の数々に立ち往生した経験が何度もある。まさに針のむしろの上で髪やせる思いである。「サヴェジ、チー」式の回答がなかったとは言い切れない。

同じように、英米の文化に関する質問にも悩まされる。「先生、イギリス人にとってB級グルメってどんな食べ物ですか」、「先生、アメリカ人って朝食に野菜を食べないってほんとですか……」わずかな海外滞在経験しかない一介の教師にわかるはずがないのではないか。思い起こしてみれば、人様の話や書物から得た二次・三次情報をもとにして見たことも触ったこともない事柄を得意顔で話したことがなかったとは言い切れない。

若い頃に、英語を母語としない自分が英語を教えることの意味を真剣に考えたことがあった。それなりに熱心に修業はしていたが、自分の語学力がネイティブスピーカーの competence に近づくことはどうあがいても無理なことのように思えた。Natural でも authentic もない自分の英語にちゃんとした教育的価値が見いだせなかった。また、英語圏の文化を極めて部分的にしか体験していない自分の知識に限りない不安を覚えた。所詮英語は外国語である。日本語で生活して、日本語で物を考える環境の中で納得のいく英語運用力や文化知識を獲得するなんて不可能だ。まして、そのような自分を学習者にさらすことにどれだけの教育的価値があるのだろうか。「先生、〇〇は英語でなんというんですか」と問われる度に気が滅入った。

それから何年もたってからのことだが、先輩教員が Medgyes (1992) の言葉を見せくれた。そこには、自分の属する文化の中で外国語を教えるノン・ネイティブ教師の利点を書いてあった。以下に、日本の状況に合わせて意識してみる。

日本で、日本語を母語とする学習者に英語を教える、日本語を母語とする教師は：

1. 学習者に対して英語学習成功のモデルとなりうる。
2. 学習ストラテジーをネイティブスピーカー教師より効果的に教えることができる。
3. 英語という言葉に関する情報をより多く提供できる。
4. 学習者が直面する問題をよりよく予測することができる。
5. 学習者のニーズに対して共感を示すことができる。
6. 学習者と同じ母語を共有することが長所となる。

これらの指摘は、迷子になりかけていた筆者に軌道修正の機会を与えてくれた。我々ノン・ネイティブスピーカー教師（以下、Medgyes に倣って non-NESTs と表す）は、学習者と同じように日本という国で英語を学ぶという経験をしてきている。それゆえ、自分自身の学習経験をもとにした様々な指導を提供することができる。他方、ネイティブスピーカー教師（以下、NESTs）は、一般的に、言語活動のモデルになることはできても、学習者の視点から指導をすることには限界がある。また、non-NESTs は英語を語学知識として体系的に学んだ経験があるので、文法事項などを論理的に説明する能力に長ける。これに対して NESTs は英語を日常の言語活動の結果として体得しているが説明するに足る語学的知識を有していないことが多い。

Non-NESTs の母語である日本語の有用性に関しても認識を深めた。日本語は、単に学習ポイントの説明をするための道具ではなく、学習者との間に強い共感を生み出すことを可能にする武器なのである。また、non-NESTs は学習者と同じ視点から英語文化と日本文化とを比較して論ずることができるし、かつまた、日本社会に生まれて生きるというアイデンティティを学習者と共有することにより、英語教育という範疇を超え、将来設計や生き方と言った深いレベルでの交流をすることも可能である。NESTs と non-NESTs はそれぞれ固有の役割を担っていて、両者はそれぞれの立場から働きかけ、互いに補完することにより調和的に英

語教育という仕事を遂行していく。当時、そのような俯瞰図式をかなりはっきりと心に描いていたことを覚えている。

歳月が流れ、今では日常の雑事に追われ、そのような悩みをもったことさえも忘れかけていたのだが、この機会にもう一度考えてみたい。今でも、あの時に認識した NESTs と non-NESTs の相互補完の関係は存続しているのだろうか。それとも時代の流れに伴い、両者には新たな関係が生まれてきているのだろうか。

おそらく、基本的な構造は変わっていないであろう。中学・高校の授業であれ、大学の講義であれ、その実施形態には変わってきている部分もあるが、従来からの NESTs と non-NESTs の分業は基本的には継続していると思われる。だが、地球規模で起こる諸々の動きの中で、我が国の英語教育をとりまく環境も確実に変化していつている。そして、それに伴い、NESTs と non-NESTs の「蜜月」関係が終焉を迎えることになるような気がしてならない。

ひとつには、我が国で働く NESTs の事情が変わりつつあることに着目する必要がある。過去には英語が喋れば誰でも英語教師になれるような時代があった。昨日までニューヨークのファーストフード店で販売員をしていた若者が今日は大阪の英会話学校のインストラクターをしているというような話をよく聞いた。現在でも似たような状況がないわけではないが、それでもしかるべき機関で正規の EFL/ESL の専門的教育を受けたネイティブ教員の供給が増えているし、当然、このような教員に対する社会的要求度は今後、高まっていくと考えられる。教授法やカリキュラムデザインの知識に長けた NESTs 人材が増えていけば、これまでのような non-NESTs が授業の主導権を持ちデザインをするという図式が必ずしもノームではなくなる可能性がでてくる。

また、海外における日本文化や日本語に対する関心が高まる中、日本語に堪能な NESTs が増加していくであろうし、そうなると、外国語学習のストラテジーを教えるのは non-NESTs の役割であるというあの図式も崩れていく。日本語を習得している NESTs は、自分自身の学習経験を生かし、日本語と英語の構造的な違いを踏まえて適切な解説やアドバイスを学習者に提供することができるようになる。しかも、それが日本語でできる者も珍しくなくなるだろう。

同時に、non-NESTs の姿も変わっていくと考えられる。国際交流やマスメディアの発達により外国人と交流したり外国文化に触れたりする機会が格段に増えた結果、英語を自由に駆使して国際的な活動ができる日本人が増えている。これに従い、我彼の壁をつくることなく、自然にかつ効果的に英語でコミュニケーションができる教育人材が増えていくと思われる。また、日本ではなく外国の教育機関で英語教育の訓練を受ける日本人もいる。かれらは NESTs と同じ経験を有し、同じ概念を駆使して話すことができる。このような人材が我が国に増えていけば、両者の関係は新たな側面を見せることになるだろう。

また、最近では帰国子女や日本育ちの外国人子女などの日英バイリンガルもめずらしくない。彼らは外国語として言葉を体系的に学習するという経験には欠けるかもしれないが、言葉・文化両面に関してモノリンガルな教師とは異なる知識や学習経験を提供することが可能である。このような背景をもつ人たちが英語教育の専門知識を身につけるなら大きな影響力になることは間違いない。

さらに、日本語を母語としない non-NESTs の勢力も無視できない。インターネットを介してフィリピン人などから授業を受ける形態はすでに定着しているといっていだろう。お隣の「英語立国」である韓国ではすでにインドから大規模に英語教員を「輸入」しはじめているらしい (The Korea Times, 2008)。まさに英語教育の自由貿易時代が到来するかの勢いである。このような現象の意味するところは大きい。英語がまさに lingua franca となりつつある時代に、欧米の文化に偏らない立場から英語を提供する彼らの存在は看過できない要素となるのではないだろうか。

仮にこのような状況変化が進展していくとするならば、NESTs と Non-NESTs はこれまでの役割分担のままで共存していけない。あなた達は英語と文化のインフォーマントであり、私たちは説明し導くプロであるというような構造は維持していけない。あきらかに彼らは我々の領域に食い込んでくる。同時に我々の中にも彼らの領域に食い込んでいける者が育ってきている。もしかしたら、そう遠くない将来に、お互いの立ち位置を新たに確認する必要がでてくるのではないか。

そもそも、理想的な NESTs と non-NESTs とはどのようなものであろう。NESTs は、今までのようにコミュニケーションの見本と文化的情報を提供することに加え、日英両言語や両文化に対するアカデミックな知識を獲得し、同時に自らの外国語学習の経験を活かして学習者のニーズに即した指導ができることが望まれる。他方、non-NESTs は、今までのように学習者と同じ言語的、文化的、社会的共通基盤から指導する能力を有することに加え、学習者の言語使用モデル足りうる卓越した英語運用能力と英語圏文化に関する深い知識と経験を有することが必要となる。してみると、両者は、その出発点は異なるが目指す理想形は相似しており究極的には同じ資質を持つことが求められていると言えないだろうか。

従来の英語教育で NESTs と non-NESTs の役割が異なっていたのは、それぞれに著しく欠けている資質があり、それを相互補完する必要性があったからである。世の情勢の変化とともにそれぞれの能力が向上すれば、必然的にその相互補完のバランスは崩れる。双方が今まで不足していた能力を培っていけば、当然、互いの活動の場は浸食されていく。その過程で新たな役割分担が生まれ、新たな関係が生まれてくるはずである。

はたしてそれが対等な共生の関係になるのか、それとも、どちらかが一方的に勢力をもつ主従の関係になるのか、残念ながら筆者には予想する能力はない。ただひとつ言えることは、もしこれからの時代の non-NESTs が我が国の英語教育を主導する役割を担うことを望むのであれば、今までの教員をはるかに超える力をつける必要があるということである。さらなる専門知識の獲得と語学力の研鑽につとめ、なによりも彼らと対等に議論できるコミュニケーション力をつけなくてはならない。「サヴェジ、チー」の時代に本当の終止符を打たなければならないのだ。前途多難である。「彼ら」は黒船のように強力だ。体系的に英語教育を学び、カリキュラムデザインや授業デザインに関して理論武装してくる。彼らは日本語を駆使し、我が国の学習者の状況も把握している。グローバル化の波はここにも押し寄せてきている。

#### 参考文献

Medgyes, P. (1992). Native or non-native: Who's worth more? *ELT Journal*, 46(4).

The Korea Times (2008-12-28 ). Non-Natives Can Become English Teachers, Retrieved Jan. 1, 2013, from [http://koreatimes.co.kr/www/news/nation/2008/12/113\\_36881.html](http://koreatimes.co.kr/www/news/nation/2008/12/113_36881.html)